

2018年4月29日の説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 24章 50～53節

説教「天に上げられた主イエス」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ルカによる福音書の最後は復活の主イエスが天に上げられる場面です。主イエスは、オリーブ山の山麓のベタニア村の付近で、両手をあげて弟子たちを祝福され、天に上げられました。復活の主イエスは弟子たちを離れていかれます。地上の主イエスと弟子たちとの関係はこれをもって終わり、復活して天に上げられたキリストと弟子たちとの新たな関係が始まるのです。

主イエスと弟子たちとの地上での明確な別れの場面です。けれども、「彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰った」と書かれています。弟子たちは大いに喜んでいるのです。普通なら別れは悲しみをもたらします。時には痛みや涙を伴います。ところが、ここでは別れが大きな喜びをもたらしているのです。エマオの村の夕べの食卓で、目の前でパンを裂いてくださっているそのお方が復活の主イエスだと分かった瞬間、主イエスのお姿は見えなくなるのですが、二人の弟子は心細くなったのではなく、喜びに満たされてエルサレムに引き返していったのと同じです。主イエスが見えなくなったことが、主イエスがどなたであるかということをかえって明らかにしたのです。見えなくても主イエスが生きておられる、主と共に働いておられることを確信することができたのです。

キリストは「人間としてのご性質においては、今は地上におられません、その神性、威厳、恩恵、霊においては、片時もわたしたちとは離れてはおられないのです」とハイデルベルク信仰問答は語っています（問 47）。昇天という出来事は、主イエスが今や天的な存在であり天にあって私たちを確かに支配してくださっていることを語っているのです。

宗教改革者マルティン・ルターは、主イエスが天に上げられたことについて、「主が近くおられた時、主は私たちから遠くおられた。主が私たちから遠い時、主は私たちに近くおられる」という味わい深い言葉を残しています。復活の主は誰にとっても身近な存在となり、私たち一人一人をねんごろに導き、世の終わりまで私たちを執成し、導くために、天に上げられたのです。

昇天という出来事は、ルカが続編となる使徒言行録に描いているように、聖霊降臨の出来事と分かちがたく結びついています。天に上げられた主が、御自身の霊を送ってくださることによって、私たちは、主が地上におられたとき以上に、主イエスと深く結びあわされるのです。そして、私たちは地上にあって、地上のこと以上に、主イエスが神の右に座しておられる天上のことを思うことができるのです。

天に上げられた主イエスを見送った後、大喜びでエルサレムに帰った弟子たちは、「絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた」と書かれています。ここに来て、弟子

たちがまだエルサレムの神殿の境内にいるということに奇異な感じを持つことがあるかもしれません。しかし、考えてみると、ルカによる福音書は神殿の場面からその記述を始めていたのです。ルカのクリスマス物語はエルサレム神殿に仕えていた祭司ザカリアに告げられた御告げから説き起こされていました。すぐには受け入れがたい天使の知らせを、やがて神の御業として受け入れたザカリアは、力強い預言の言葉をもって神をほめたたえるのです。そして、ルカによるクリスマス物語は、エルサレム神殿に両親に抱かれてやってきた幼子イエスを見つけて、年老いた預言者シメオンやアンナが神の御業を力強くほめたたえるところで結ばれるのです。

あのときは、まだほとんど誰も気づかなかったかもしれませんが、神殿の片隅で歌われていた神をほめたたえる歌が、主イエスの十字架と復活と昇天を経て、今や主イエスを仰ぐ弟子たちによって力強く歌われているというのです。そしてその讃美の声は、弟子たちによって、エルサレムから全世界へと広がっていきこうとしているというのです。そう考えると、ルカによる福音書の結びは、この福音書の出だしと見事に対応しています。

ところで、弟子たちが「神をほめたたえていた」というときの「ほめたたえる」という言葉は、主イエスが弟子たちを「祝福された」というときの「祝福する」と原文では同じ言葉です。ギリシア語でユーロゲオーという単語で「よい言葉を語る」という意味です。主イエスが私たちによい言葉、私たちを生かすいのちの言葉を語ってくださったので、それは祝福となったのです。そして、そのようなよい言葉をいただいた私たちが、神に向かってよい言葉を語る時、それはすなわち神をほめたたえる讃美となるのです。さらに、神に対してよい言葉を語るができる人は、自分に対しても隣人に対してもよい言葉を語る者とされるのです。

日々の煩わしさの中で、どれだけ人をさげすむ思いを抱き、人を傷つける言葉を吐いてしまう私たちでしょうか。主イエスの弟子たちの地上の歩みも、どれだけ高慢と無理解と自分中心な思いに満ちたものであったかは福音書が正直に描いてきたとおりです。

けれども、そのような私たちのために地上に来られ、このような私たちと共に歩み、このような私たちのために、十字架につき、復活され、今や天に上げられた主イエスを仰ぐとき、弟子たちはついにより言葉にあふれる日々を手に入れることができたというのです。何があろうと、これから行く手にどんな困難や迫害が待ち受けていようとも、神の確かな祝福の中で、神をほめたたえて生きる歩みを始めることができたのでした。そのような祝福と讃美の交わる中を生きる幸いが与えられたことを記して、ルカはこの福音書の筆をおくのです。この同じ幸いにこの福音書を読んできた私たちもまた招かれているのです。